

塩竈に息づく、杉村惇の世界

——杉村豊さんインタビュー——

11月末の開館に向け、整備中の「塩竈市杉村惇美術館」。塩竈市にゆかりのある洋画家・杉村惇画伯の作品を常設展示する美術館です。今回は、杉村画伯のご子息である杉村豊さんに、新しくオープンする美術館について、お話しいただきました。

——塩竈市と、杉村画伯とのエピソードなどありましたら、教えてください。

杉村 父は、昭和20年に仙台に疎開し、21年に塩竈に転居しました。39歳のときです。塩竈での、活気ある風物に囲まれての暮らしは、東京生まれの父の絵に大きな変化をもたらしました。塩竈で過ごした時期に父は『自分の固有の色調は黒だ』と意識するようになりました。当時、鹽竈社の黒漆の神輿をしきりに『立派だなあ』と感心していたことを覚えています。



▲杉村 豊さん

——杉村作品の魅力について教えてください。

杉村 父の絵には、風景画や人物画もありますが、特に熱心に取り組んでいたのは静物画です。美術界では『静物学者』とも呼ばれていました。静物画は、対象をじっくりと描くのに適していたからかもしれません。

父は、古びたランプや色あせた堤人形などを集めていました。そういった物たちが経てきた時間というものに、父の心が共鳴したからでしょう。

塩竈に暮らしていた時は、魚や港まちの風情を題材にした絵もよく描いていました。

——「塩竈市杉村惇美術館」に期待することはありますか？

杉村 市民の芸術活動の拠点に育ってくれたらうれしいです。場所が、中心市街地にありますので、まち歩きの中に立ち寄り、ほっと一息つけるような場所になってくれたら良いですね。



▲「魚市場」(スケッチ・1947年ごろ)



▲「ランプの静物」(油彩・1964年)

同じ建物に公民館の機能もありますので、サークル活動をしながら、絵も見てもらえるような、親しみのある美術館になることを期待しています。

——どうもありがとうございました。